

閉会挨拶

著者	青木 三郎
雑誌名	人文社会系分野における研究評価 : シーズからニーズへ : 研究大学強化促進事業シンポジウム報告書
ページ	123-125
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155102

閉会挨拶



青木 三郎

筑波大学人文社会系長

閉会の時間となりました。私は人文社会の系長の職を、拝命しています。きょうのテーマは、人文社会系分野における研究評価です。主催校の筑波大学を代表して、最後に皆さまにごあいさつをするようにとオーガナイザーのほうから承っています。私自身の仕事は、まさに人文社会研究の評価の現場にいます。

つまり立場上、人文社会系の先生がたの人事を行っています。人事を扱う立場から申しますと、研究業績や教育業績などをどのように評価するかが最も大きな問題です。きょうのシンポジウムも問題はたくさん出てきましたが、結論はなかなか一つにはまとまりません。ところが、これで実際に人事をしていくこととなりますと相当、シビアな問題になります。

一言でいいますと、大学は知識を学ぶ学び舎よりかは、今はグローバル社会の中で、いかに難問に研究者や教育者として取り組んでいけるか。そのような人材を集めてきて、採用する。これが大学の人事です。一般企業の人事とは、ちょっと異なります。その際に研究業績で申しますと、これは人文社会科学系のわれわれのような研究もありますし、総合大学であれば当然ながら自然科学の研究もあります。

人文社会系の研究に関して申しますと、これは社会一般でいわれていますが、人文社会研究の元気がない。予算が取れない。役に立たない。実際にきょうも朝、池田潤先生のほうからiMDと研究雑誌のジャーナルのダイバーシティをどのようにして計るかのお話がありました。これは指標のモデルだけではなくて、実際にこれを使ってみたらどうなるかが問題です。私のところは、実験

的にiMDを使っています。

実感として分かることは、ある方の研究者としての業績について、ジャーナルの特徴はある程度、見ることができます。ジャーナルとは研究者が集まっていく一つの場所と言えるでしょう。いわば広場です。虎ノ門ヒルズのようなものです。多様な機関と人々が集まって、いろいろな意見が出てくれば、これは発信力もありますし、いい意見や考え方も出てきます。それを共有することもできます。同じようにジャーナルのiMDが高ければ高いほど、そのような知識を広くシェアできるジャーナルであることを見ることができます。

しかしながら、その論文がどのぐらいすごいのかは、そのジャーナルが出てくる場所だけでは分かりません。ジャーナルの審査体制や、どのぐらいの件数がそこに応募されて、どのぐらい採択されているのか。どれほど引用されているのか。きょうの研究指標の議論の1つは、その辺りにあるのでしょうか。ただし、この論文のすごさや、人文社会系の研究論文のすごさは専門性の高さは、独創性を定性的にある程度見せてもらわないと評価ができません。しかしながら、それだけでは自然科学の業績には勝てません。

自然科学の研究者の論文を見てみますと、若い方でも年間で10本や15本などがあり得るわけです。人文系や社会科学系で10本や20本の人はむしろ、おかしいです。普通は1人で書きます。個人研究かグループで行うこともあります。社会科学では共同研究や共同執筆のカルチャーは、データサイエンスを中心にして行われています。それに対して、特に人文科学は哲学や思想、文学は1人でするものです。大勢の人の共同作業で作られるものにもかかわらず、個人の冠がつくのが普通です。年間で5本や6本、10本は書けません。

ただし、これはカルチャーの問題です。私も自分で論文を書いているときには、特に大学院生と一緒に共同作業をしています。彼らは彼らの役割を持っています。5人いますと、5人の共同執筆で5本できます。年間5本の掛ける3で、学生と一緒に3年間で15本ぐらいの論文になります。しかしながら、人文系の研究者は、大体は名前を1人で出します。年間3本です。ひょっとすると、そのような違いだけではないでしょうか。従って、量的に論文の数だけでは比較ができないことにはなってきます。

この議論をしていくときりがないので、まとめに入ります。きょうのテーマのキーワードは、多様性です。多様性と混同してはならないのは、断片化と細分化です。この多様性をどのようにして捉えていくか。これは大学で何ができるのか。大学が人類、地球の難問にいかにして取り組んでいくのか。そのようなときに最も重要な考え方になっていきます。

きょうは読売新聞社の松本先生から、人文社会科学は価値をちゃんと考えなさいとメッセージが送られました。まさに価値付けの問題です。私はその価値付けは、恐らくは「述語」に出てくるだろうと考えます。大学は、高校生から大学に入り、専門知識を学び、専門性を身に付けて社会に出ます。研究者として続けていきます。高度専門知識人になります。

「学ぶ」という述語から「難問に取り組む」という述語に、今の大学は変わりつつあるのでしょうか。そのようなことが今の世界の大きな流れの中で位置付けられるのではないか。中世のソルボンヌ大学やボローニャ大学、あるいは、19世紀のフンボルト大学が持っていたような役割とは、もはや違います。従って、現在の大学の役割や価値は何かを本当に考えないと何のための評価で、何のための評価指標なのかを見あやまることになります。ともするとなんのために研究者や教育者を大学は抱えて、人材育成をしていくのが全く分からなくなってしまいます。きょうは、そのようなことを考えさせてもらったので、本当に貴重な機会でした。参加した全ての皆さまと、パネリストの皆さま、オーガナイズしてくれたスタッフの皆さんにも感謝の意を表して、私の締め言葉とします。ありがとうございました。